コミュニティくさつ　2010年　秋号（通算89号）　編集発行　財団法人草津市コミュニティ事業団　URL http://www.kusatsu.or.jp/

市民がつくるまちづくり情報誌

コミュニティくさつ

2010年 秋号

見まもる目 つながる安心

「おはようございます」。老上中学校の校門前の様子。毎月８のつく日は夢街道「あいさつ通り」推進友の会の皆さんと生徒会が一緒になって、あいさつ運動をします。さわやかな秋空の下、たくさんの笑顔であふれています。（写真：大條）

今号のイラスト　絵：大村恵

もくじ

② 昼間独居のまちで…（宅老所あおばなの家）
③ 毎日食べるものだから顔を見て届けたい（西木米穀店）
④ このまちで人と暮らしを見守り続けて（ショッピングセンターいとや本店）
⑤ 他人だからこそできること（ある郵便局員さんの話）
⑥⑦ 夢街道「あいさつ通り」の軌跡と奇跡 推進友の会／老上中学校インタビュー
⑧ 俳句散歩「秋」／ワンワンパトロール
⑨ ええやん ご近所ライフ①　新コーナー
⑩⑪ ゆっくり草津街道物語⑫ 「明日の幸せを素朴に願う　追分の道」
⑫ 熊谷栄三郎の徒然草津

イラスト：大村恵

孤独は山になく、街にある。
一人の人間にあるのでなく、大勢の人間の“間”にある

三木清「孤独について」（人生論ノート）より

皆さんは暮らしの中で、住んでいるまちの中で孤独を感じたことありますか？

「孤独は山になく、街にある。一人の人間にあるのでなく、大勢の人間の“間”にあるのである。」と言ったのは哲学者の三木清さん。周りに人がいるからこそ「孤独」は感じるのかもしれません。

では孤独を感じさせない「まち」には何があるのか。今回は街中での「見守る目・見つめる目」に注目です。

あなたを見守ってくれている人を想像してみてください。どんな人が思い浮かびますか。家族や親せき、民生委員さん…きっと他にもあなたを見守ってくれてると思いますよ。そしてきっと、あなたの見守る目を必要としている人がいることでしょう。

昼間独居のまちで…
宅老所あおばなの家（木川町）

木川町で高齢者のサロン活動「宅老所あおばなの家」をしています。木川には高齢者がたくさんいます。二世代、三世代同居の家庭が多いのですが、家族は仕事や学校があって、おじいちゃんやおばあちゃんが留守番。昼間独居です。出かけることもなく、話し相手がいたって毎日、よその家には行きにくいもの。介護が必要な身になると病院やグループホームなど知らない土地で過ごすことも寂しいものです。

参加するのは木川に住む80歳以上の方たち。今年100歳を迎える人もいます。この方は美容院でおしゃれして活動日を待ってくれてます。カレンダーに丸をつけて心待ちにしている人、全員の会費を自主的に徴収してくれる人、今まで食べられなかったカレーを食べるようになり家族を驚かせた80歳にして食わず嫌いを克服した人（笑）…特に難しいことをしているわけじゃない。高齢者もメンバーもみんなでつくり、教えあい、食事をして共に過ごすだけ。肩ひじ張らず、自然の流れで人生の先輩たちと触れ合っています。参加する高齢者をお客様扱いせず、キャッチボールのできる関係づくりを心がけているのが長続きの秘訣かも知れません。

いま思うように動くことができる私たちも、年を重ねると不自由なことも出てくる。だから来てくれる高齢者の姿は自分たちの通る道、良いお手本にしたいですよね。木川は高齢者世帯の親戚・近所付き合いが今なお続いているところです。病院通いや買い物だって隣近所で声をかけあえるところ。みんなが目配り、心配りしながら見守りあえているところなんです。町内の理解と協力があってこその活動だと皆さんに感謝です。

年に一度の文化祭では、アコーディオンの演奏で歌う懐メロに笑顔があふれます。

毎日食べるものだから 顔を見て届けたい

西木米穀店（野路町） 西木亨さん・早苗さん

父母から米屋を継いで30年。ずっと米の配達をさせていただいています。ここ草津でも家族の人数が減ってきたことを実感します。毎日食べるお米を配達するという仕事だから家族やまちの変化がよく分かるのかも知れませんね。お子さんが独立してご夫婦だけになったり、連れあいを亡くし急に寂しい暮らしになったり…。

高齢者のお客さんには、特に気にかけて話かけるようにしています。市内のとある新興住宅に配達した時、そこの高齢のお客さまが「近くのスーパーが閉まって外に出る楽しみがまた一つなくなった。さびしいね。」と言っていました。

配達するとつい1時間くらい話しこんでしまう家が何軒もあります（笑）。特に高齢者のお客さんですね。思い出話から身の回りのことまで、色々なお話をしてくれます。こちらも楽しくてね、「駅までお送りします。乗ってください。」と声をかけることもあります。

無理なこともありますけど、「できることはしてあげたいな」って気持ちを持っています。

明るい姉・早苗さん（上）と
実直な弟・亨さん（下）

お客さんには健康でいつまでも長生きしてもらいたい。だから商売としては効率が悪いかもしれませんが、高齢者だけになってしまったお得意さんなどには少量ずつ買ってもらうことを勧めています。

だって米屋だから、やはり「おいしいお米を食べてほしい」って思います。長く置いて米にカビが生えたり、虫がついたりして米が美味しくなくなったら困りますし。それに配達の数が増えると、それだけ顔を合わす機会も増えますものね。

届けたいのは感謝の気持ち

配達の際には、お米と一緒に私たちの感謝の気持ちを一緒に届けたいと思っています。父母が作ってくれた野菜をお米に少しだけ添えてみたり、金魚やセミなど季節を感じるものを折った折り紙に絵や字を添えてプレゼントしたりしています。次の配達の際、玄関にその折り紙を飾ってくださっていた時は本当にうれしかったです。届けたいのはあくまで感謝の気持ちなので、野菜も「家で獲れたもの」「少しだけ」に意味があると思うんですよね。買ってまでするのは少し違うなって。

このまちで人と暮らしを見守り続けて

ショッピングセンター いとや本店（片岡町）

北川栄さん・富美代さん

常磐の片岡町にある「いとや」さんは、この地で約110年もの間、商売をされているショッピングセンター。食料品から日用品、祭事品まで日々の暮らしに必要な物から地域の取り組みで使う物まで、ほとんど揃うお店です。

4代目となる北川栄さん・富美代さんご夫妻はご商売を通して、まちを見つめてきました。

この辺りは独居老人が多く、出歩くことができる人は良いが、それもできずに家に籠ってしまう高齢者が心配なところです。出歩くことが困難になった高齢者には電話ひとつで配達もされてます。

地元の人たちにとって暮らしに必要なものはほとんど揃う地元密着のお店

「配達に行って玄関や勝手口で顔を見ながら話をするんです。ちょっと耳を傾けるだけでも高齢者って喜んでくれます。それがうれしいし、元気な顔を見ると私たちも安心できます。」と富美代さん。

売る人と買う人の間には「お互いのことを知りあっている」信頼感、あたたかい空気があります。

高齢者と並び、このお店の大切なお客さんはまちの子どもたち。「この辺の子なら大体どこの子かわかります。おじいさんやおばあさんに連れられて来てくれると『○○さんとこの子か』って感じで自然と覚えていきますね。」とは栄さんの言葉です。

駄菓子コーナーに目をやると、白い大きめの紙に、マジックで「50円」とか「30円」と書いています。手書きの値札の前で、子どもたちが「う～ん」って考えている姿を想像すると、微笑ましくて思わず笑みがこぼれます。

初めての買物を地元のお店で経験することで、その子はこのお店なら安心して買物ができるし、親も安心してお使いに出せます。こうやってお店が地域の人に大切にされ、お店も地域に還していく。

そんな素敵な関係を築いていった結果が創業約110年ということに納得でした。

（絵と字）　中村明雄

ショッピングセンター　いとや本店
草津市片岡町566-3
電話　568-0008

笑顔でインタビューに応える北川栄さん。

イラスト：大村 恵

他人だからこそ、できること

ーある郵便局員さんの話ー

まちなかを走る仕事

少し前まで郵便局の大切な仕事の一つに「集金」がありました。銀行振込が主流になった今では少なくなりましたが、今でも集金に行かせてもらう家もあります。またその頃は、銀行・生命保険・薬屋さん…と郵便局だけでなく、色々な業種の人が自転車やバイクで街中を走りまわっていました。自然と対話が生まれ、「客と販売人」「金銭の収受」という関係や業務を超えたコミュニケーションがありました。

制服と郵便局を象徴する赤色のバイクに、お客さんは信頼感を覚えます。と同時に局員は「いい加減なことはできない」という責任感をもちます。信頼と責任、これを土台とするコミュニケーションで「心安い間柄」を築いていく時代でした。

おかげさまで、今でもそんな信頼関係は続いています。でも最近、少し気になることもあります。心安くしていたお客さんたちが高齢になるにつれ、周りの環境が大きく変わりつつあることです。とりわけマンションに住む高齢者の境遇ですね。

マンションの高齢者

とある高齢のお客さんの話です。住んでいた土地にマンションが建つことになり、お客さんもそこに入居しました。しばらくして連れ合いも亡くされ、家族が学校や仕事に行っている昼間は家に独りきり。毎日テレビを観るだけの生活です。マンションは駅前の便利な場所にあるけれど、「近所づきあい」というものがないので情報も入らない。外出したときには、マンションの入口ボタンの押し方が分からず管理人さんに開けてもらったこともあるそうです。外出もしにくくなります。

気がつくとベランダから眼下を行き交う電車をボーっと見てたりする毎日で、「ふと下に吸い込まれそうな感じがする。」なんて言うんですよね。「変な気を起さんと、誰かと話したくなったらすぐ電話してや、すぐ来るから。」と言ってからは月に1回は電話がかかってきますよ。

他人だからこそ

昔ながらの農村地域などでは、まだ隣近所でのつきあいが残ってます。手押し車を押して家を行き来する。急な雨には隣りの家に「雨やで、洗濯物入れや。」と声をかける気安さがある。こんな些細なつきあいや日常会話を求めている高齢者がマンションの壁に囲まれ、孤独に耐えていたりするんですよ。まちなかに住む人の方が閉じこもりや認知症になりやすいと聞いたことがありますが、分かる気もします。

物騒な時代です。家族からは「戸締りをしっかりするように」「人が来ても、むやみに出ないで」なんて言われるのかもしれませんね。些細な悩みだからこそ、身内だからこそ言いだせないってこともあります。他人だからこそ聞いてあげられる言葉、してあげられる支えがあるのではないかと思っています。

こんなエピソードも

時計を腕に４つも５つもつけているおじいさんがいました。でも見ると全部、止まっているんです。「巻くネジもないし、どうしたら動くのか分からない」とおじいさん。「この時計は電池式だから、電池を交換しないと動かないよ」と教えると、「じゃあ電池を買ってくる」と言います。

「時計の電池交換は時計屋さんにしてもらわないとダメやで」と言うと、「どこで交換したらいいのか分からない」とのこと。結局、商店街の時計屋さんで全部交換して、次の訪問時に持って行きました。

夢街道「あいさつ通り」の軌跡と奇跡

家庭が変わる！学校が変わる！まちが変わる！

草川邦章さん（夢街道「あいさつ通り」推進友の会 会長）
中谷仁彦さん（老上中学校長）

これではいかん ほっておけん

長い教員時代を老上小学校長で終えた草川さんが、老上公民館（現：市民センター）の館長になったのは平成2年のこと。このころの老上学区は南草津駅の開設を目前に控え、新興住宅地の住民が60％を超え、小学校も児童数が1200名を超えるマンモス校となるなど急激な人口増加の時期を迎えていました。

周辺の環境が大きく様変わりする時代を教員と公民館長の立場で見つめ続けた草川さんは、まちに住む人たちの微妙な変化に気づきました。

行きかう人々がお互いに挨拶を交わす光景も見えず、コミュニティを育む場である公民館に出入りする住民の大半は新しい住民の人たち、昔ながらの住民との交流もどこかぎこちない。

中学校では生徒の服装は乱れるだけでなく、授業の邪魔をする生徒もいます。人が増えることで人に与える変化、それは本当に微妙なものでしたが自身も住民である老上のまちが着実に殺伐とした町に向いているように感じたのです。「これではいかん！ほっておいたら『心の渇いたまち』になってしまう」との危機感に駆りたてられました。

あいさつ通りの誕生と涙もんの5年間

公民館長だった草川さん、公民館で高齢者を対象とした「やすらぎ学級」に在籍していた皆さんを中心に声をかけ始めて生まれたのが「夢街道あいさつ通り」の活動です。スーパーから公民館を経て中学校へと向かう800mの道のりを「夢街道あいさつ通り」と名づけ、8のつく日に立って挨拶運動をします。「開会式」ならぬ「開通式」は平成5年12月12日。草川さんの思いが通じたのか、人が人を呼び会員証をもった人はなんと1350人にも上りました。

順調な滑り出しのように見えた活動ですが、「そうはうまくいきません。旧住民からは『挨拶なんて当たり前のことを大層に…ええかっこするな』って言われるし、声かけた高校生には凄まれるし、ポケットティッシュを配ったときなんかは放り投げる学生もいました。地元には足を引っ張られ、子どもたちの反応は良くないし。5年間は涙もんでした。」と当時を振り返る草川さん。

「最初の5年間は涙もんでした」
当時を振り返る草川さん。

ベースは家庭だから

涙ぐましい日々を支えたのは「子どもたちや住民同士が支えあい、信頼しあえる気持ち、つながりを育むことが今、必要なんだ。その基本こそ挨拶なんだ」という強い気持ちと、その気持ちを分かち合える仲間たちでした。お互いに励ましあいながら継続することで活動は広がりと地域内外での認知につながりました。

17年という息の長い活動へと成長した「夢街道あいさつ通り」ですが、

草川さんの視線は子どもたちだけでなく親にも向けられています。「小学校のPTA総会で呼ばれ、挨拶の大切さの話をさせてもらったんです。すると翌月の活動日、子どもたちの挨拶はいつもより元気があったんです。やはり家庭が変わらないとダメなんだと感じましたよ。地域だけでなく、ベースである家庭も大切なんだってね。」草川さんの夢は続きます。

挨拶が中学校を変えた

活動の目的は挨拶を通じて「自分をつくり、仲間をつくり、ふるさとをつくる」こと。この活動を教育の現場に見事に取り込んでいるのが老上中学校です。この活動が中学校にどのような影響を与えたのでしょう。

「以前は学校全体に健全とは言えない雰囲気が漂っていました。ところが今は学校全体に落ち着きと潤いがあります。学習できる雰囲気ができ、生徒の集中力が高まります。人の話をしっかり聞く、ノートを取る、先生の話を自分なりに考える、すべて人との関係から生まれるんですね。妙な緊張感を持たず、余計な神経を使わなくてよい安心安全な学校の雰囲気が先生と生徒・生徒同士の信頼関係を生みだしてる。こんな当たり前のことで子どもたちの学力は確実に伸びるんです。」と中谷校長は力説します。

「この当たり前の雰囲気を学校にとり戻された理由の一つに『あいさつ』があるんです。『たかが挨拶、されど挨拶』なんです。」。

私は老上学区に住んでいる者です。
よく犬を連れて
散歩に出かけますが、
ちょうど学校帰りの
老中の生徒さんに出会います。
いつも生徒さんの方から
"こんにちは"と挨拶をしてくれます。
礼儀正しくさわやかで
とても気持ちのいいものです。
きっと学校で
ご指導して下さっているのでしょう。
いい所に住んでいるなと嬉しく思います。

老中に届いた匿名のハガキの内容（抜粋）

生まれた新しい校風

中学生といえば挨拶も照れくさい、はにかむ年頃。そんな中、老上中には新しい校風が根づきつつあります。それは3年生が率先して大きな声で挨拶をすること。部活でも体育祭でもいちばん声が大きいのが3年生。「3年生が率先して『おはよう』と声をかけることで、1・2年生もそのうち素直に挨拶を返すようになります。同時に友だち同士もお互い『おはよう』と掛け合うようになる。対話が自然と始まっているんですね。3年生を見ていると後輩たちに『老中を頼むぞ！』といった気概すら感じます。」と校長先生。

今年の入学式でのできごと。新入生を前に3年生の生徒会長が歓迎のあいさつをするために壇上へ。彼はいきなり「みなさん、こんにちは～」と切り出しました。モゴモゴしてる新入生や保護者に、もう一度「みなさん、こんにちは」と投げかけると、次は会場から大きな声で返事が返ってきたそうです。後に彼にその時のことを聞くと「最初、返事が返ってこなかったので、自分の話を聞いてくれているのか心配だった」とのこと。用意していた原稿を急遽変更してのできごとだったそうです。彼の言葉を聞いて老中の新しい校風ができたことを校長先生は実感したそうです。

たかが挨拶、されど挨拶

この校風は周りの住民をも幸せな気分にさせてくれています。学校に届いたハガキには「数年前に老上に引っ越してきたが、出会う子どもたちが、いつもどこでも挨拶してくれます。とても気持ち良く、このまちに引っ越して来てよかった」と記されていました。地域の住民が中学校を誇りに思うことで子どもたちに自信がつく。子どもが変われば親が変わる。挨拶から始まる対話を大切にしてきた老上のまちづくりは長い時間をかけて今、たくさんの芽を出し始めました。「子どもたちを元気に、そして高齢者も元気に、さらにふるさと（地域）も元気に」が実感できるようになりました。

（聞き手・文　辻浦岩水）

「あいさつで学校に落ち着きと潤いがでた」と語る中谷校長先生。

俳句散歩　秋

秋と言えば中秋の名月（旧暦8月15日）がよく俳句に詠われています。丁度、サトイモが食べごろとなるので、「芋名月」とも言われます。その一月後の月を「後の月」（旧暦9月13日）とか「栗名月」と言われます。今日は月を詠んだ芭蕉と蕪村の俳句を見てみましょう。　（解説　橋詰辰夫）

名月や　池をめぐりて　夜もすがら

芭蕉

中国の詩人李白（701～762）が、「杯を挙げて名月を邀え、影に対して三人と成る」とか「頭を挙げて名月を望み、頭を垂れて故郷を思う」と詠んでいるように古くから中国では、月を眺めながら想いに耽ったり、嬉しいにつけ悲しいにつけ酒を飲んだりしていました。この風習、文化は日本でも同じようです。

芭蕉は、中秋の名月を眺め、池の周りを歩いたり佇んだりしながら自分の俳句人生の過去、現在そして将来を想い、また友人知人、師や弟子を、そして故郷への想いを巡らせていたのです。

40数年前、筆者はこの句を読み芭蕉の真似をして、真夜中に京都の大沢の池を廻って名月を眺めました。人生経験の浅い若僧でしたから、ただ遊び半分でしたが、神妙になり、それなりの感慨を覚えた記憶があります。

皆さんも月を眺めながら池の周りを歩いて、おのが人生に想いを巡らせてはいかがでしょう。

月天心　貧しき町を　通りけり

蕪村

蕪村が旅の途中か、所用で出かけた帰り道に、夜も晩くなり月はもう天心（空の真ん中）に来ています。気がついて見るとそこは貧しい町並みで、昼間は汚く見える貧相な造りの家も生活ごみも見えず、貧しいが心は清らかなその町の住人も寝静まっています。

月光は汚い物を覆い隠し、貧しい町ですら詩的な眺めを作りだしてくれます。丁度、雪が降ると町の景色が一変するように月の光もまた、詩興をくすぐります。

同じ蕪村に「名月や夜は人住ぬ峰の茶屋」と言う句があります。これも同じように昼間は旅人で賑わった質素な峰の茶屋も、夜はひと気もなくなり月の光が一幅の絵に変えています。月光は音楽でも、ベートーベンのピアノソナタ「月光」や童謡の「月の砂漠」のように美しいが悲しく寂しい旋律を作り出します。やはり、秋の月は詩の世界に無くてはならない主役です。

街を見守る住民　いやいや住犬です！

ワンワンパトロール　（草津地区）

朝夕、近所で愛犬の散歩をしている人をよく見かけますね。草津地区ではかわいいワンちゃんたちも「まちの見守り」に一役買っています。

旧草津川の堤防など散歩スポットが多い草津地区では犬の散歩を楽しむ人がたくさんいます。その分、ゴミ捨てや、ふんの後始末など飼い主さんのマナーで少し困ったことも。そこで考えたのが「ワンワンパトロール」です。犬と散歩するということは街中を歩いているということ。逆にパトロール役をしてもらう！という逆転の発想です。「パトロール犬」のワッペンを犬に付けて歩くと、いつもの散歩がパトロールをしている自覚まで出てくるから不思議。飼い主さんのマナー向上と街の見守り、一石二鳥の身近な方法でみんなの意識が変わりつつあります。かわいい小型犬も少し強面の大型犬だって、ここでは共に街を見守る住民、いやいや住犬なんです。

文　矢原功

第1回　元気なまち

今回から新コーナー「ええやん ご近所ライフ」のスタートです。あなたの暮らす「まち」はどんなところですか。隣の人はどんな人ですか。今朝から何人のご近所さんと話しましたか…。「近所づきあいって面倒、わずらわしい」って思ってる人も多いのでは。でも考えてみると、ここって自分がこれから何十年、もしかしたら生涯を暮らすところかもしれません。どうせなら楽しく暮らしたいもの。もう一度、ご近所を見つめなおしてみませんか。きっと色々な人が色々なことをしていることでしょう。それはお隣さんかもしれません。まちはあなたの一歩を待ってます。そしてあなたにはきっと楽しいご近所ライフが待ってることでしょう！

「草津はエエまちやな」という声をよく耳にする。住んでる人から聞くのは実に嬉しい。琵琶湖が近くのどかな自然と田園がある一方、大型量販店やコンビニが多くて暮らしやすく京都へも近い。こうしたまちにあって、さらに充実した日々の生活を求めるなら、やはり地域のコミュニティを大切に考えたいものである。

私が住んでいるグリーンハイツ北町（笠縫東）では、幸い地域のコミュニティがうまく育っていると思うので、ご紹介させていただきます。地域の活性化に少しでもお役に立てれば嬉しい限りです。

約200戸の新興住宅街として誕生から30年近いまち。高齢化による課題も多いけど互いにできることで協力し合って助け合える環境づくりが大切だと思っています。それは理屈ではなく楽しい出会いの機会を多く持つことに尽きると考えられます。そんなわけで、今回はわがまちの「缶ポラ隊」をご紹介しましょう。

「親睦の機会を多く持ちたいが、何をするにも費用がかかる。自分たちの町内から出る廃棄物を業者任せにしないで自分たちで有効利用できないものか」Yさんの切なる叫び、いや熱意をきっかけに、7名ばかりで空き缶回収を始めたのが、今ではメンバーも23名に。毎月1回、地域の不用品を回収し、その収益金で、春は自治会館の庭で「桜まつり」、秋には町内の公園で「防災フェスティバル」を実施できるまでになりました。ティッシュペーパーの全戸配布も加わりました。

具体的には、午前8時までに各ご家庭の前に不用品（新聞、雑誌、ダンボールなどの古紙・空き缶・ウエス）を出してもらい、缶ポラ隊の隊員が集めに回ったあと業者に一括回収してもらいます。当初は自転車や一輪車で集めていましたが、創意工夫をこらしつつ、近隣者のご厚意により軽4トラックとリヤカーを借りることができました。また市社協から基金の交付を受けてリヤカーも手に入り随分と効率アップにつながりました。ありがたいことです。

春の「桜まつり」では、新鮮な魚介類の網焼きが定番。モチつき、ぜんざい、おつまみ色々も出て、自治会館の庭で町内の皆さんが顔合わせです。共に食し、呑み、語らい、遊びの場として格好の機会になっています。缶ポラ隊の収益金で皆さんに無料で参加いただけるのも自慢の一つ。ほのぼのサークルをはじめ、近所の奥様方も進んで協力してくれるからできることです。

秋の「防災フェスティバル」では、自主防災隊とタイアップして、バケツリレー、消火訓練、大声コンテスト、○×クイズ、警察署や消防署のご協力イベント、非常食の体験など盛りだくさん。今回はさらに身近で手に入る野草や木の実、琵琶湖の小魚などを食材に、目からウロコの非常食の祭典まで加わります。

古紙と空き缶が、努力次第でこんなイベントに化けるものなんですね。高齢化が進む中、有事の際の隣近所の助け合い、防災意識の高揚など「安心・安全のまちづくり」は、お互いの顔を知り合える出会い・交流の場が何より大切なんだと思うことができる缶ポラ隊の活動です。

第12回

明日の幸せを素朴に願う
追分の道

ゆっくり草津 街道物語

分岐点を意味する「追分」の地名が、ここ草津にもあります。東海道と東山道（中山道）の分かれたところといわれる志津の追分、それぞれに伸びゆく道で牛や馬を追いたてた旅人や商人の姿が思い浮かびます。

活人石と姥餅焼

今回のスタート地点、追分会館を伯母川に向かうと新しい家々が立ち並ぶ住宅地が開けます。このあたりは大将軍遺跡といわれ、奈良～平安時代の建物や井戸の跡、絵馬や土器などが多く出土しました。近くからは約20ｍ幅の道の跡が確認され、役所があったと考えられています。近江では瀬田に国庁が、また栗東の岡に郡役所が置かれていました。この下に置かれる郷の役所がここ追分にもあったのでしょう。

八幡神社では深い森と木々の間から聞こえる鳥の声が私たちを出迎えてくれました。平安時代に建立され、追分の守り神として応神天皇がまつられています。室町時代にはこの辺りの領主だった宇野氏が武神として崇め、戦国期には下賀茂神社の材料を使って社殿が造られましたが明治に焼失しました。江戸のころにはもっと広い森に囲まれていたという八幡さんも、現在ではすぐ近くまで住宅地が迫っています。再建された社殿の前にある「寛政」の文字が刻まれた石造りの常夜灯が歴史の深さを今に伝えています。神の使いであるハトの石造に見送られ新幹線の高架下の道を歩きます。

（イラスト）大村恵

「十四代金澤」と趣ある字で書かれた看板を掲げた酒屋さんに着きました。店先に栗の木の化石といわれる「活人石」があります。字のごとく、人を元気にさせるというこの化石、江戸時代の『東海道名所図会』では、駒井家（現在の脇本陣）の床の間に飾られ客人をもてなす様子が描かれています。ここ金澤家の先祖である金澤好澄は茶人である傍ら、宿場名物「うばがもち」をのせる姥餅焼の皿をつくり旅人の目を楽しませました。今では焼く人もいなくなってしまいましたが、この姥餅焼の皿や壺は草津宿街道交流館で見ることができます。

野の神さまと大切な牛

金澤酒店から少し下ってみましょう。追分グラウンドの隣に野上池、その先には中池、下北池と三つの池が並びます。野上池を少し入ったところにあるのが野上神社です。ここはその字が示すとおり野の神さまです。春になると山の神がおりてきて田の神になるとのいわれから、「野上さん」として地元の人々に大切にされてきました。

農作業の大切な労力として牛が大活躍していたころのお話。五月の節句になると、大切な牛が元気でよく働いてくれるようにと野上さんで祈願していました。お参りの前

野上神社の境内には牛の石像

には野上池で牛の足を洗っていたそうです。またこの辺りでは「牛が病気をせず元気に過ごす」との言い伝えから、お祭りにお供えしたチマキのお下がりを牛に食べさせる風習もありました。境内には牛の石造、社殿の蛙股にまで牛が彫られているのも納得です。

機械化で牛の姿も消えた今、野上さんの佇まいが地元の人たちの積み重ねてきた暮らしぶりや祈りを伝えてくれています。遠目でこの神社を見てみると丸い小さな丘の上に神社が建っていることがわかるでしょうか。実はこれは追分古墳。境内にある説明版では直径38ｍの円墳とあります。出土品から4世紀ごろのもので、草津で最も古い古墳ともいわれています。

石に彫られたお地蔵さん

夏の暑さが厳しかった今年はヒガンバナの花も少し遅れ気味。路地を歩いていると珍しい白いヒガンバナを見つけました。ボランティア仲間の話によると黄色のヒガンバナもあるとか。花の時期には葉がなく、葉がある時期には花がないという珍しい植物ですね。

趣のある大きな屋敷にビックリ

こんな話をしているとお寺に着きました。妙源寺です。ここは先ほどの追分の領主、宇野氏の菩提寺です。栗太郡誌によると妙源寺という名前は宇野氏の戒名から付いたというもの、ここにいた妙源尼という尼さんの名から付いたという2つの説があります。境内には北向きにお地蔵さんが集められています。自然の石に彫られていることから室町時代のころに庶民が彫ったものだと考えられています。

点在する大きな屋敷に驚嘆の声をあげながら行者堂へと向かいます。行者堂は草津ではここ追分のほか、本町や横町でも見られます。追分の行者堂は左に不動明王、右に役小角がまつられていますが蔵王権現や孔雀明王がまつられている行者堂もあります。江戸の終わりから昭和の始めまで、庶民の間で奈良県吉野の大峰山にお参りする修行が盛んに行われました。どこの行者堂にもお参りのしるしであるわらじが下がっています。最近はお参りする人も高齢化し、さすがに大峰山まで登ることはないようですが護摩焚きは今も行われています。境内に高いタラヨウの木を見つけました。葉の裏に字を書くと浮かび上がるタラヨウは「葉書の木・郵便局の木」とも言われ、渋川の草津郵便局でも見ることができます。

平和への祈り

ここから今日の最終地であるロクハ公園まで車で移動です。「ロクハ」という名前に素朴な疑問を持っている人もいるのではないでしょうか。昔、ここにはたくさんの松があり、その松の緑が波のように見えたことから「緑の波＝ろくは」と呼ばれるようになりました。江戸時代、山本喜六氏が草津村・矢倉村の灌漑用水として開削したロクハ池は現在、上水道の貯水池として利用されています。

平和がずっと続いてほしい

芝生広場の入口に平和モニュメントがあります。沖縄の彫刻家である金城実氏と老上中・新堂中の両美術部員により共同制作されたものです。またこのモニュメントの土台となっている大きな石は新名神の工事に出てきたもので、碑には「愛こそ平和をかなえる」と刻まれました。表に戦争が始まった12月8日、裏には終戦となった8月15日の日付が記され、碑の下には千羽鶴や未来へのメッセージ、あおばなの種など平和への願いが込められたタイムカプセルが眠っています。モニュメントの向こうに広がる青い芝生、そこで遊びまわる子どもと見守る親…こんな光景を見てると、この平和な時間がずっと続いてもらいたいと感じずにはいられません。

追分をぐるりと歩いた今回の街道物語、そこには人やモノの出入りが盛んだった宿場町から少し離れ、田や畑を中心とした暮らしがあったこと、その暮らしのすぐ隣に神社やお寺があって、明日の幸せを願う素朴な信仰があったことを感じとることができ、しみじみとうれしくなりました。

熊谷栄三郎の

徒然草津

つれづれくさつ

第2回

秋空に流れる赤い川

熊谷栄三郎

庭のキンモクセイが、咲いたと思ったらすぐ散った。どの家のも花色が冴えず、香が薄かった気がする。それだけでもものの足りない思いのする秋だが、じつは、もっともっと残念なことが私にはある。

キンモクセイの香に誘われるように飛来することがあるアカトンボの大群が、今年も来なかったのだ。

ホントに、本当のことを言おう。

アカトンボのざっと数万匹もの群れが、まるで赤い川となって我が家の上空を流れる光景を、過去五回も私は見たのである。

一回目は昭和五十六年九月末の朝だった。キンモクセイの芳香が満ちる庭に出た私は、庭木や屋根をかすめつつ、南から北へ、つまり琵琶湖の方へ飛行するアカトンボの大群を発見した。編隊はキの字を二つ連ねた形のつがいで構成され、幅数十メートルにも及んでいた。羽音がシャカシャカと響き、二時間たっても、途切れなかった。見上げ続けて、会社に遅刻した私を笑ってほしい。

山地に集まって避暑をしていたアキアカネが、繁殖地めざし旅をしている途中の光景だということを、知人の昆虫学徒に教わった。次の年も、その次の年も見た。計五年五回、すべてキンモクセイの芳香の季節だった。

もちろん、我が家が彼らの飛行コースの真下にあったことが幸いした。それに、キンモクセイの季節になると、秋空を見上げる習慣が身についていたおかげでもあったろう。

あのすごい光景を見なくなって久しい。もし冴えないキンモクセイのせいでないとすると、いったい何を恨めばいいのだろう。

編集後記

▼「チャオ」。この言葉ひとつで世界中の誰とでも友達になれます。挨拶ひとつでみんな明るく。老上地区がんばれ！（大條）▼「ロクハ公園でヤブマメの花を見つけました。雑草も季節になればドキッとする綺麗な花を見せてくれます。人も同じかな？」（橋詰）▼秋の夕方、しんみりする時間もなく夜がやってきます。そうだ、あの本の続きを読まなくては（中井）▼一気に進んだ秋色に、なんと忙しい日々。皆様もお出かけを。（矢原）▼今回の取材でキラキラ輝く人生の先輩たちに出会いました。「元気チャージ」で私もがんばります！（大村）▼暑い日々が続き、いきなり秋がやってきて急に寒くなりました。今年はドングリなど木の実が少ないとか。熊だけでなくトトロも困る。（荒川）▼製薬会社のCMではありませんが、日本語では「みる」を意味する動詞や漢字がたくさんあります。「見守る」を英語では「keep an eye on～」ということをインターネットで見ました。LookでもWatchでもSeeでもなく、Keepが使われることに何となく納得した私です。英語か、懐かしいなぁ（茶木）

くさつ子どもフェスタ 2011

～つくって 遊んで つながろう！～

1/16（日） 10:00～13:30

無料 野村運動公園グラウンド

もちつき・ギネスに挑戦・手作り
ステージ・ちびっこ・おもしろ自転車など
楽しいコーナーがいっぱい！（下記まで問合せ）

市民編集ボランティア募集！

コミュニティくさつ編集部
（財）草津市コミュニティ事業団内
〒525-0037
滋賀県草津市西大路町9－6（まちづくりセンター内）
電話 （077） 565－0477
ファックス （077） 562－9340
メール com-com@mx.biwa.ne.jp
URL http://www.kusatsu.or.jp/

再生紙使用
～地球にやさしいまちづくり～